

学生の主体性を引き出す 学び場づくりをどう進めたか —事業開発コースでの経験から—

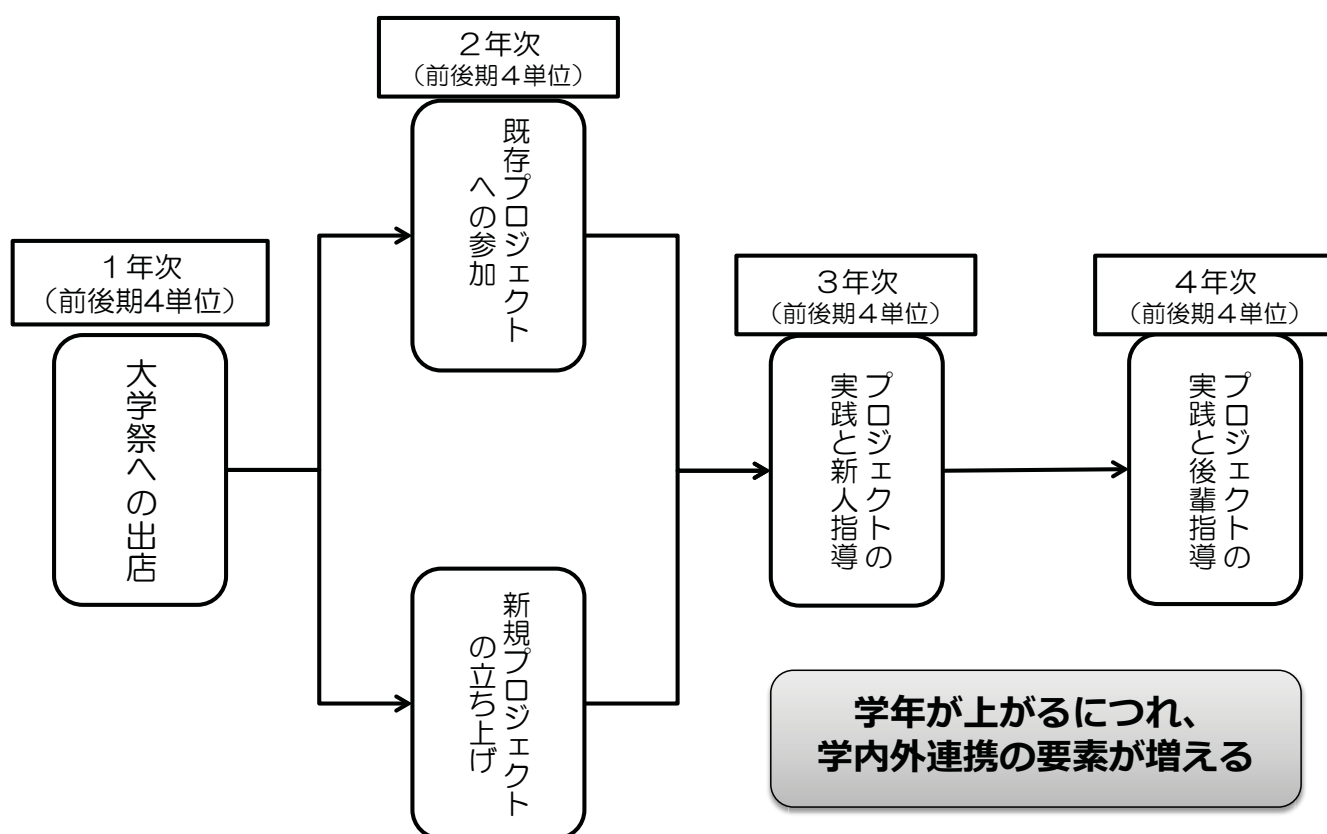
九州産業大学経営学部 間間 理 (ききま おさむ)
kikima@ip.kyusan-u.ac.jp

九州産業大学の概要

- キャンパス：福岡市東区松香台
- 学部：経済・商・経営・国際文化・芸術・工・情報科学
- 学生数：10,504人
 - 経営：1,752人（各年募集定員 400名）
- ここ20年ほどで受験生数は大幅減
- 経営学部では、AO・推薦入学者比率の拡大が進行中

事業開発コースの特徴①

- 専門科目の演習科目として設置
 - コース修了は卒業要件ではなく、希望者は基本全員受け入れる
- 1年前期から4年後期まで設置
 - 最大32単位まで習得可能
- 全学年の演習を同一教室で実施
 - 履修者数は毎年100名ほど。構成比はおよそ1年50名（およそ学科の25%）、2～4年各15名



事業開発コースの特徴②

- 学生たちが自らプロジェクトを企画・実行し、そこから学ぶ
 - プロジェクトのテーマには原則として制約なし
 - 同学年のみでも、異学年混成でチームを組んでもよい
- 担当教員は複数で立ち位置はアドバイザー。
- 学生たちの眼から見たコースについては、
「経営学部 事業開発コース 紹介ビデオ」
で検索してぜひご覧になってください。

**学びの場を創っていく中で
私が実体験から学んだこと**

– まず自分が変わることから –

課さず、受け入れ、委ねる

- 起業家マインドを育てる文献や思考力を鍛える課題に取り組ませたが…
 - そもそも勉強が好きではない学生が集まった
 - 勉強ができる自分をイメージできない
- 学生がしてみたいことをさせてみた
 - 見事に結果はでなかったけれど目つきが変わっていた

口を出さず、じっと耐える

- 学びのペースをつくるのは教える側ではなく、学ぶ側である
 - 助言が生きるだけの能力がないことに教員が気づかず、結果として“助言から学ばない”
 - 教えてほしいことは、学生からききにくる
 - ひたすら待ち、耐える
 - 面倒の見方は、上級生のほうが上手である

結果ではなく、志を重視する

- 結果を出すために尽力した教員から、真っ先につぶれていった
 - 過去に縛られ、現在に絶望し、無理が重なる
- 学生の現状と将来を憂いている人を探し、連携プロジェクトの可能性を探った
 - 教員以上に職員とのつながりを大切にした
 - 学外のどこにその可能性があるのかを見極めることに、専門性が活きる

評価はせず、してもらおう

- 教員の評価は学生の心に届かない
 - 多くの学生は教員の言うことを聞きたくない（教員が減点主義で、本音を言わないことを学生は知っている）
- 様々な立場の人に、損得なく評価してもらおうこと
 - 対外的な活動報告やアピールの機会を設けることこそが教員の仕事である

ぶつからず、頭を下げる

- 学内の「協力なき批判」には、まず頭を下げることから
 - 反論しても、関係悪化以外の何も生まない
 - 対応に時間がかかることをまず自分が認める
- 外部とのトラブルでも真っ先に責任者である教員が頭を下げることから
 - 責任をとることは当然のことですが、同時に教育効果もあるようです

**今、向き合っている課題
について**

参加人数の壁を破りたい

- 1年次に参加してくる50名のうち、残るのは半分ぐらいなのが現状
 - 学生も含め全体で問題共有することから
 - コーチングを入れて「自分を見つめ、他者を活かす」力をつけることにトライ中
 - 他大学や学部間交流を増やして刺激を強める

時間と労力の壁を破りたい

- 他の教職員・上級生に委ねています。
 - 共同担当授業で初めての先生にも入りやすく
 - リーダー会議を設置、方向性を確認
 - マニュアル化による労力削減は、事実上失敗（読まない・分からない）
- 他学部・大学の事例や情報交換および勉強会の機会を増やしています。
 - 名刺交換、Facebook交流、演習の見学などは大歓迎です！